歴史地震
第27号(2012)73頁

[講演要旨] 歴史地震の京都有感記録に対する注意点の興味深い実例

－花園上皇による元亨三年十月二十九日(1323.11.28)の地震動の考察－

石 橋 克 彦

An interesting example of historical earthquake motion in Kyoto to be carefully examined:
The ex-Emperor Hanazono's consideration on the earthquake shaking of
November 28, 1323 (the 3rd year of Genko)

Katsuhiko ISHIBASHI

●歴史地震の研究では、地震史料から、地震動の年月日・時刻、地点、震度を推定することが基本となる。京都は、地震史料が豊富であるために、(市内複数地点の震度が得られる場合は別として)一つの震度観測点として、多くの歴史地震の広域震度分布の作成に用いられてきた。また、微弱な揺れまでを含めて、京都の有感地震の変遷といった分析がなされることもある。ある史料に「大地震」と書かれているからといって、京都全体が強く揺れたとは言えないのは自明だが、それを無視して「京都の震度3」などと評価してきた。これは仕方ない面も強いが、常に注意すべきことである。

●[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版を http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/ で公開中)を整備しているなかで、この問題に関係する興味深い事例に気が付いたので紹介したい。それは、元亨三年十月二十九日(J暦1323年11月28日)の地震で、『増訂大日本地震史料・第一巻』は「京都地震強シ」という綱文を立てている。しかし、史料(1点のみ)には、実際は京都の揺れは微弱だったらしいことと、それが「京都地震強シ」と早トチリされたことの背景が明記されている。

●目下検討中の、地震史料DBの本地震の綱文・史料・注記を以下に掲げる。(事象番号:13231202)

【綱文】花園上皇が竹中殿(現在の京都市右京区嵯峨天龍寺付近か?)の桟敷(眺望のために高く造られた建物)の上にいたとき、20時頃、非常に強い地震の揺れを感じた。しかし、持明院殿(現在の京都市上京区安楽小路町付近)に戻って聞いたところでは、ごく微弱な揺れだったという。

(A)〔花園院宸記〕○史料纂集『花園天皇宸記』
《廿九日》(元亨三年十月)、(戊|子、) 雨降、末剋雨脚休止、入夜時雨、或晴或陰、今日御幸竹中殿、自今日可為御所也、廣義門院白地御幸、予又所参也、女房二人乗車、至竹中殿、於桟敷眺望之間、(中略)於桟敷供酒膳、(中略)戌剋地震、頗大、(干時在桟敷上、而後歸洛、或云、甚以微|少云々、若依座上似大動歟、將又依地歟、)
(注石橋:花園上皇は、竹中殿(現在の京都市右京区嵯峨天龍寺付近に13世紀半ばに造られた亀山殿の一部と思われる)に御幸し、桟敷(亀山殿の中にあった眺望のための高い建物だと思われる)の上で酒膳を供されているときに非常に強い地震の揺れを感じた。しかし、自らの御所の持明院殿(現在の京都市上京区安楽小路町付近)に戻ったのち、京都では微かな揺れだったと聞いて、桟敷の上だから強く揺れたのか、または場所によって違ったのかと、興味深い考察を記している。)

●花園上皇(1297-1348、1308-18天皇在位)は非常に好学の人であったが、地震の揺れに関する上記のような客観的・合理的な状況説明と考察は、古代・中世の地震史料のなかでは希有と思われる。「竹中殿」がどこにあって、「桟敷」がどんな構造物かが非常に重要だが、その特定はむずかしい。中世史家で知る人は知るのだろうが、鎌倉・室町期の院御所を詳述した川上貢『日本中世住宅の研究・新訂』(中央公論美術出版、2002)には出ていない。『花園天皇宸記』中の竹中殿・亀山殿・嵯峨殿に関する記述や、花園上皇の兄・後伏見院の女御・広義門院の父の西園寺公衡が竹林院・竹中殿と呼ばれ、京都西郊に竹中第を有したことなどから、とりあえず上記のように推定したが、是非解明したい課題である(史料稿本が別の条で「按竹中殿ハ即チ嵯峨殿ナリ」と断定しているのは疑問)。

●竹中殿が天竜寺付近だとした場合、地盤条件は持明院殿とあまり変わらないと思われる。桟敷が揺れやすかったのは確かだろうが、地震が京都西郊の浅発微小地震だった可能性もあるだろう。